

後輩たちへのエール！ その28

2020年5月19日

すべてが今に繋がっていた

◇今回は、冬頭映子さん（カフェ・飲食店・結納店経営）によるエールです！

在校生のみなさん初めまして。私は昭和58年の卒業生です。卒業してから37年、去年名古屋から関へ戻ってきて、現在関市内でタピオカドリンクのカフェと飲食店と実家の家業だった結納店を経営しています。

頭が特別良かったわけでも、優秀な大学に進学したわけでもない私ですが、関高校を卒業してから、名古屋へ出てほんとに波乱万丈いろいろなことを乗り越えてきました。そんな私が37年ぶりに関に戻ってきた今思うことを、そして私が卒業してから歩んできた人生のほんの1部ですが、今後の皆さんの人生の中で少しでもプラスになるようなことがあればと願って書かせていただきます。

「人生ってなるようになっていく・人生いろいろ、何が起こるかわからない。勉強も大事だけど、でもそれに対応できる力を付けいくことが大切」

関高校時代

人生の中で最高に楽しい幸せな時間でした。今戻れるのなら一番戻りたいのが関高校時代。その当時の関高校は今の関高のように勉強が特別にできるといった感じではなく、わりと生徒がのんびりとし、勉強もスポーツも自主性を尊重してくださる先生方に恵まれ、自由に過ごせる最高の場所でした。

そんな中で私はただ単に先生がかっこいいから！という友達の簡単な誘いによってバスケットボール部に入部しました。甘い考えで入った私はそこから3年間、練習地獄に苦しめられ、先生が怖くてやめるとも言えず、毎日毎日授業が終わってから2,3時間走りっぱなし、おかげで中学の頃ふくよかだった私があっという間に10キロ近くやせてしまったのです。周りの友達からは「どうしたらそんなに痩せられるの？」と聞かれるほど。もちろん「バスケ部はいれば？」と即答。何十年たった今でもその頃の練習風景が夢に出てくるほどです。目が覚めて「あ——夢でよかった！」ってほっとするのは。でもほんとに不思議なんですよ！夢にまででてくる、そんなバスケット部の鬼コーチが、今や私の近所の飲み友達なのです（笑）運命ですねー。そのお話はまた後程。

3年生になって、バスケ部も引退しいよいよ進路を決めるような時期になってきました。

私は当時から相当のミーハー、当時大人気のマッチやとしちゃんのいる東京にどうしても行きたい！

そんなことは先生にも両親にも言えませんが、東京にいきたい！という気持ちは胸いっぱい。たいして勉強ができたわけではありませんが、進路相談の時、担任の先生から指定校推薦の話をいただきました。さすが先生よくわかってらっしゃる！こいつは頑張って勉強してお正月乗り越えて試験受けるタイプじゃないなって。先生はお見通し。ほんとにそうなんです。持続力がない。飽き性、すぐ嫌になっちゃう。

ありがたく指定校推薦をいただくことになりました。しかし、問題が,,,,,東京の大学がひとつもない。。。。

初めて母に言いました「私東京の大学行きたい！」母は申し訳なさそうな顔をして私に言いました。「お姉ちゃんとお兄ちゃんを大学出したら、もう映子を東京の大学に行かせるお金が残ってないの。4大に行くお金もないから、どこでもいいから名古屋の短大にして。」って。が——ん。両親が朝から夜遅くまでお店を頑張っている姿を見て育った私はいつも大変だなと感じていたので両親が困ることはしたくないという気持ちでいっぱいでした。だけど東京に行きたい気持ちもいっぱい。相当悩みました。話せる女の先生には何故だか「西村さんならがんばって受験して東京の大学いったほうがいいわ」と言われました。余計に悩みました。だけど両親は指定校推薦ならあちこちに受験しに行く交通費や宿泊費などのお金も省けるしあちこち受ける受験料もかからないし、ほんとに助かるわと言われました。そんなにお金がないの????。。。。さみしい気持ちになりました。

指定校推薦の中から好きなのところを選び、と担任の先生に言われても、名古屋の有名3大女子大学はすべて4年生、短大はたったの一つででした。しかも家政学部の食物科。私は英語が大好きで英文科に行きたかったのに。。。。選択も何もありません。両親が願う名古屋の短大というともうその一つだけ。

名古屋か。。。。しかも聞いたことない女子大の短大。しかも食物科。。。。意味わからん。なんで私が食物科?? 英語得意なのに。。。。

東京も、英文科もあきらめたとしても、名古屋だとしたら有名3大女子大行きたいな。せっかく選べるのにな。そう思いました。なんだか自然に涙がこぼれました。

推薦をもらわず自分で受験して東京行く！そう言いたい気持ちでいっぱいです。でも両親にはわがまま言えない。お金を出してくれるのも両親。自分の力じゃなんもできない。

暗い気持ちのまま担任の先生にその短大の指定校推推薦お願いしました。

事情を知らない周りの皆からは「え——、指定校なのに、なんでその大学もらうの—? 信じれん」と言われまくりました。そのたび胸が痛く泣きたくなりました。皆がだんだんと受験ムードになってきた頃、お気楽なお正月を過ごし、勉強ももう全くする気持ちにもならず、みなからは。「いいな—気楽でうらやましいわ—」と言われ、でも、まわりのみんなが頑張っている姿を私は逆にうらやましく見ていたのです。

短大では栄養の勉強や、料理の時間がほとんどで、いつまでたっても「なんで私がこんなこ

としてのの」っていう気持ちが全く消えませんでした。その頃からまだついこの前まで、私は人に学校の名前も何を勉強していたかもということが嫌で、そんなに嫌いじゃないのに「料理嫌い」といって反抗心は消えませんでした。

なので食物関係の仕事につくことは全く考えず、普通のOLになりました。

そしてしばらくして、料理から離れた私が結婚してまたまた料理に苦しめられることになるのです。

同居していたので3食全員の食事はもちろん、自営業でしたので、会社の職人さんの昼ご飯、仕事が終わると一杯飲むのでおつまみを作り、もてなすのが日常でした。一応食物科だったので料理はなんとかこなせましたが、義父は長野の田舎育ちの人、恐ろしいことに、生きたナマズをもってきてさばいてかば焼きにしたり、蜂の巣をとってきて蜂の子をとってフライパンでいったり、鳥の羽をむして料理したり、ソバの実を石うすでひいて粉にしてそばを作ったり、すべて私をアシスタントにして料理するのです。名古屋の街の中に住みながら、なんという田舎生活！おかげでどんな魚でも上手に三枚におろしたりさばけるようになりましたし、いろんなことができるようになりました。今では笑い話だし、いろいろ教えてもらって感謝することばかりですが、あのときは、なんで私がこんなことしなきゃいけないの??って泣いた日もありましたし、家出したこともありました。

そんな義父は若くして67歳でなくなっていました。何十年たっても義父に教えてもらった料理は忘れません。でもそこにはやはり短大で食物を2年間学んだ基礎があったからできたのだと実感します。

主人の両親がなくなり、主人の仕事を支えて頑張っていましたがいろんな苦勞の連続で、子供が成人してから熟年離婚することになり、その後、私は介護の道を選びました。実の父親が脳梗塞で倒れた時から施設でお世話になっていて、素晴らしいケアマネさんがついてくださっていて私もこんな風に人の支えになれる仕事がしたい！と思ったのがきっかけでした。国家試験の介護福祉士の資格や、介護施設の管理者の資格などもとって主任として管理者としてののりに乗って仕事をし、近いうちに施設の管理者にという話にもなっていた矢先に、関市の実家で家業の結納をついでいた兄が急死しました。家には弱ってしまった母一人になり、私は関に戻って母の面倒を見る決心をしました。といっても、すぐに名古屋の仕事をやめることができず、とりあえず役職を離れ、社員からパートに代わり、名古屋と関をいったりきたり、徐々に引っ越しをして、荷物を全部関に運び終えたときに、母も急死。途方にくれました。母の面倒を見るために仕事も役職も捨てて引っ越してきたのに、なんて運命なの??

何百年も続いてきた 店の名前を消すことはできない！この思い一心でした。ですがこの時代、結納をする人はほとんどいません。結納以外の商品は時々お客様がきてくださっているので、その商品は残し、何か自分でできること、と考えた時に、「そうだ飲食店だ！」と思ったのです。

なんという運命なんでしょう。関に戻ってきて、高校時代にあれだけ悲しい思いをして決意して嫌々進んだ食物の道に戻ったのです。今、朝から晩までキッチンに立ち料理を作ってい

ます。それも毎日ニコニコと楽しく。
支えてくださる近所の方がた、お店に足を運んで
くださるお客様、両親に感謝の気持ちでいっぱい
です。

私が食物科へ進んだこと。泣いたり逃げ出したり
しながらも、無茶苦茶な義父の要望でいろんな料
理の仕方を覚えたこと。離婚して一人になったか
ら関に戻ってこられたこと。

今こうしてこの場所で店をやっているいつも思
うことは、人生には全部筋書きがあって、たとえ
自分の意思と反した道へ進んでいったとしても、
何かそれには意味があって自分の人生の中であ
とからどこかで絶対に何か繋がっていて、役に立
ったり重要になってくる時がくるんじゃないか
ということです。あれだけ周りに隠していた食物
科という名前を、今は胸を張っていうことができ
ます。私が悩んで泣いて悲しくて絶望だった進路
でしたが、37年の長い道のりを超えて今、私の
第2の人生に繋がっていったのですから。



「人生ってなるようになっていく・人生いろいろ、何が起こるか分からない。勉強も大事だ
けど、でもそれに対応できる力も大切。今悩んでいてもきっと素敵な未来が待ってますよ！」
これが私からの在校生の皆さまへのエールです。

余談ですが、実家に戻ってきてすぐに、私の姉が近所に住んでいる姉の友達を紹介してくれ
て、すぐに飲み友達になったのですが、なんと、その旦那様が関高校時代の私の鬼コーチだ
ったのです！37年ぶりに恩師と再会し今は毎日のようにお会いして仲良くしていただい
て、ちよくちよく飲みにも連れてっていただき、当時の関高校の思い出話に花が咲いていま
す。人生ってほんとに何が起こるかわかりませんね（笑）

10 CAFE by masuya

冬頭（旧姓 西村）映子